挿花意匠 再編

404

昇平日久。閑人逸士。所遊藝事亦復何限。其中品格最高。無浮躁氣。清恬近道者。獨插花爲雅其爲技也。雖別草木之性。審陰陽向背之理。縮之擴之。横斜參差。以取其勢。天工人其代之。苟非

用心精巧則不易造也。夫飽食終日。無所用心。聖人以奕棋爲猶賢乎已。但奕棋者。必須敵手。滿腹機心。籌籌要勝。以之擲花與物無競。既自怡悅。又以樂人者。其賢果何如也。擲花者。匠次編剞

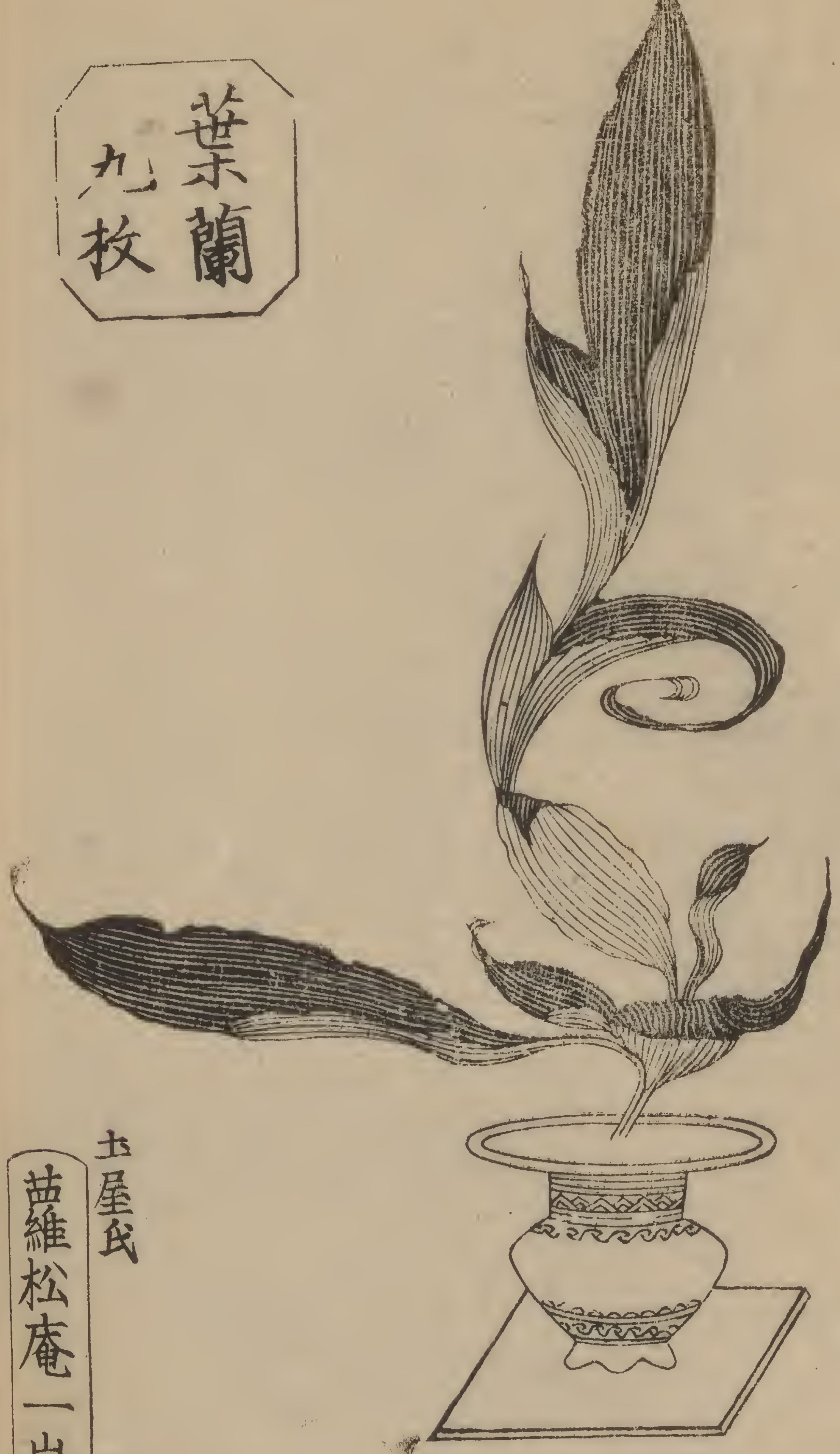
成。尋崇余乎。漫豈班議。

丙申嘉平月　玉山池桐孫述

松竹梅

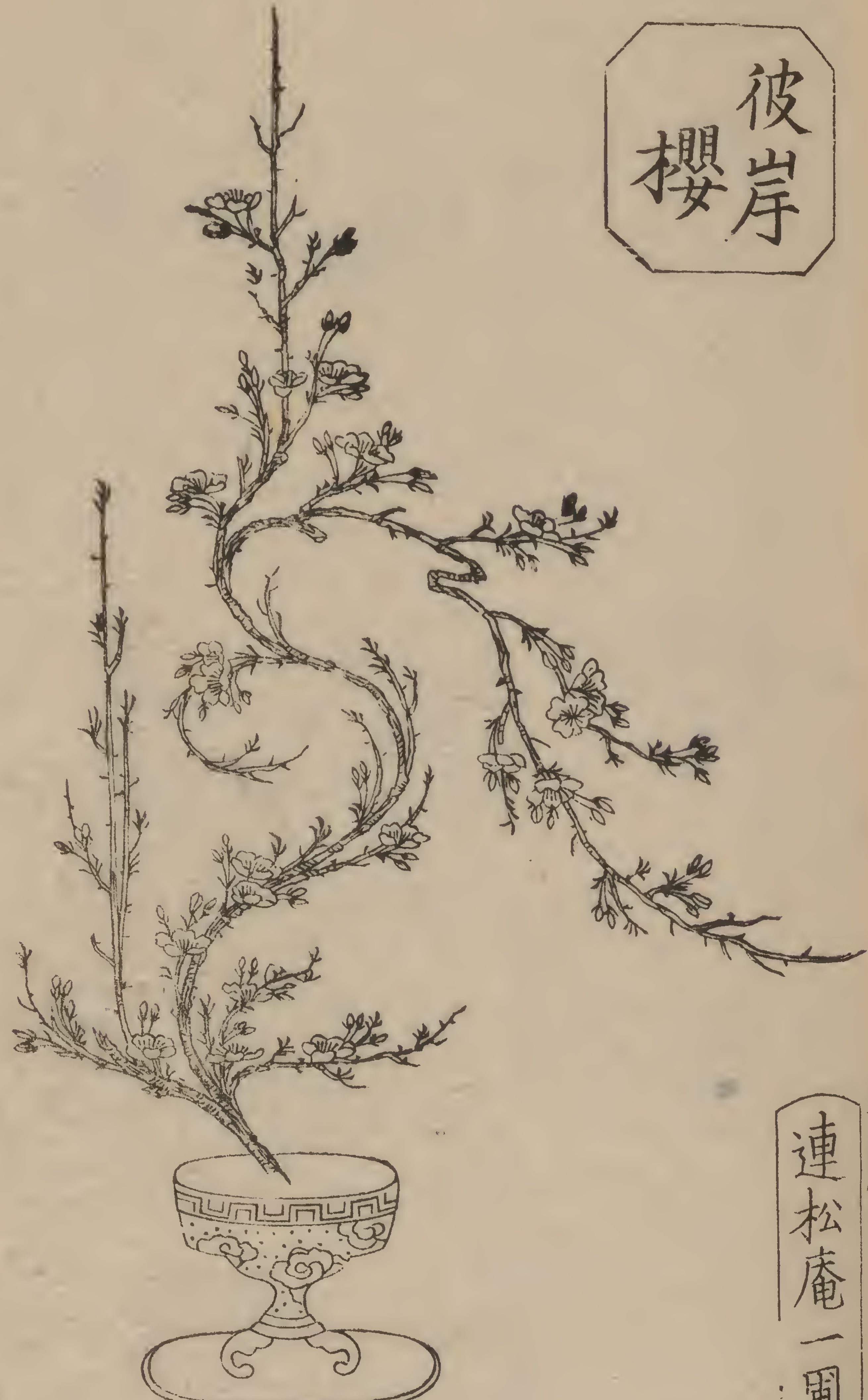
里松庵悴
鶴松庵一岡

葉蘭九枚



土屋氏
茜維松庵一峩

彼岸櫻

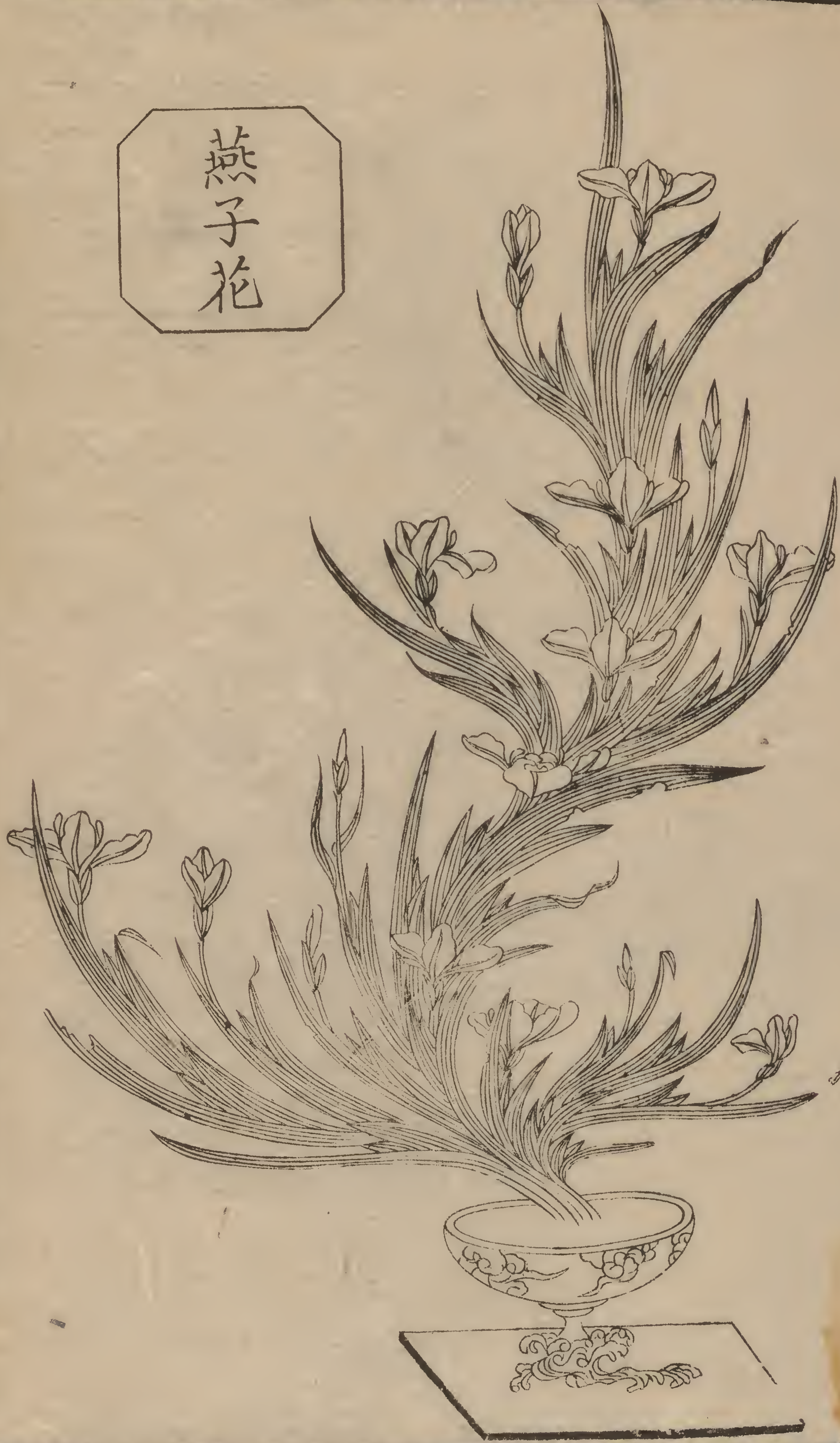


内藤氏
連松庵一圃

熊谷草

嶺松庵一瓢

燕子花



一寅

北條氏

葉牡丹

森川氏

一瓢

鶴ノ丸菊

寶松庵一玉

彼岸櫻

土屋氏
曲松庵一吾

菊五種

安井氏
東松庵一潮

水仙
七本

越川氏
知松庵一之

葉蘭
百枚

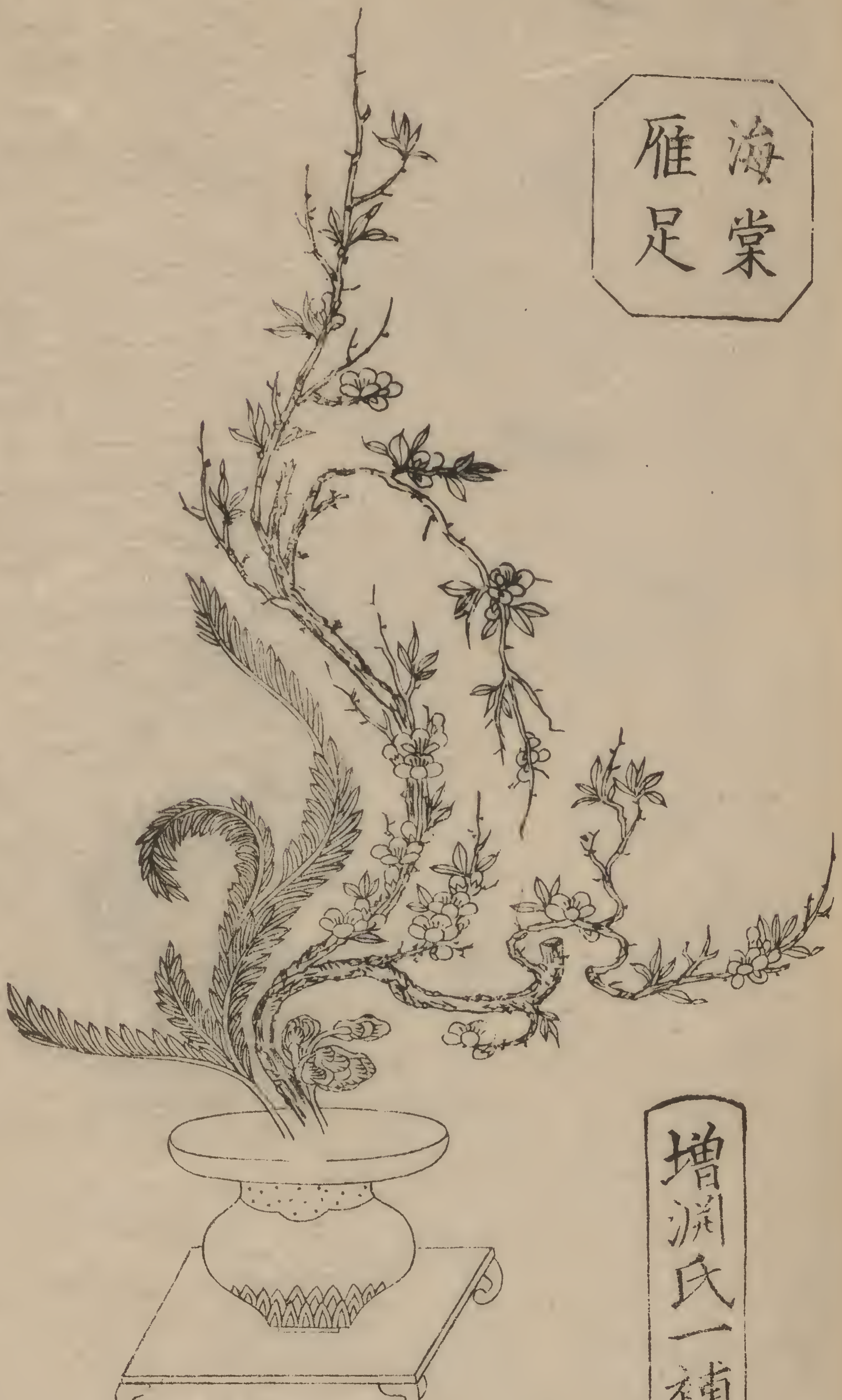
中野氏
澤松庵一鷹

燕子花

北條氏

北條氏一鱗女

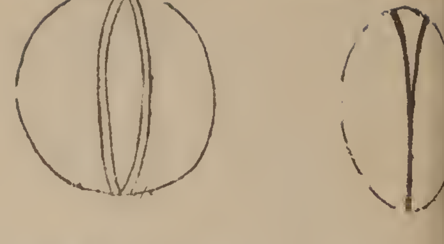
海棠雁足



増淵氏一補

陵
萍蓬草

三浦氏
浦松庵一壽



右本を害て[illegible]
始る處なり是まて諸君も我も専ら用し所なり
予か自得せし處の藥研配ハ文化の頃始るか最初ハ
諸君の笑を受しといへとも今ハ識あらし人ゝ又ハ他流も
専ら用る事となりぬ夫のみならす各ゝか門葉を
持るもおほくハ一壽の工夫せし残用るものてはさ
あれハ夫ゝに工夫せしなとゝ言ぬらしして専らよ
用るなりされと諸君一人も多く用ひたまふ残
我も喜ハしかと思へる而已

里松庵誌

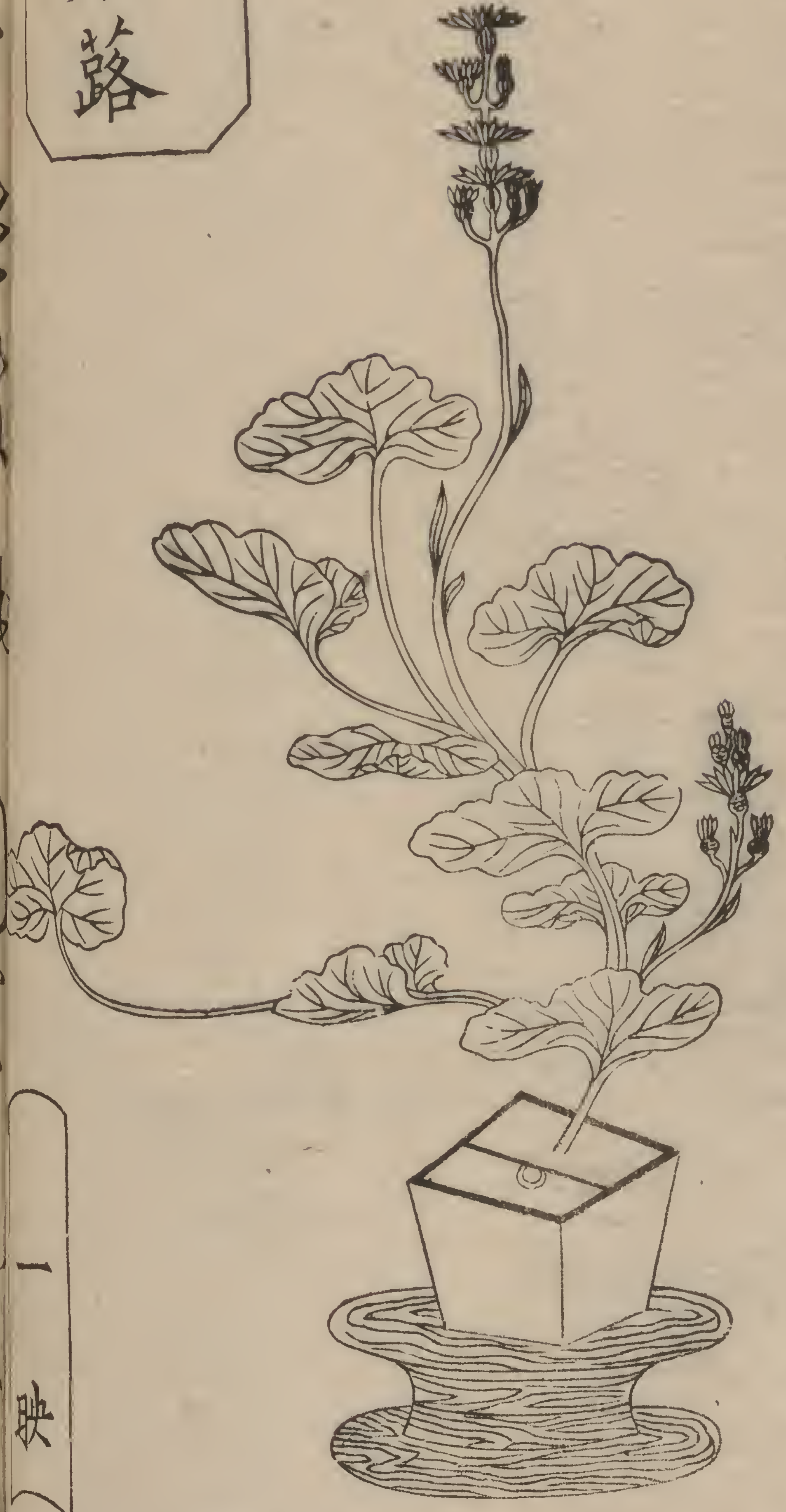
野梅

越川氏
知松庵一之

右ハ越知松庵の父祖無窮先年
既ニ安永壹丑年ニ志ありしかとも
板木儀者也所蔵ありしに其父
終一句を記し然を今年愛校
前篇に見えたる知る為なし

示之法数瓶乃図或者秋乃
葉末千至葉乃葉形子廣子稽古
或者會席床形花を形の納
合根志あれ水の指道子揮出ゝ尚
形を能く写し置漸々子勤

石蕗



一瓶

揷経さん花壺四時の限界表徳者

依て不同採安見る揷安速也

天保十一庚子夏乃日

東都 浅草山居

六十翁 里松庵一壽撰

薄
生娘菊

玄松庵一楽
遠藤氏

明の鶴
芍薬

稲田氏
[illegible]庵一桂

白玉椿

交松庵門人 嶋氏
雲交庵一龍

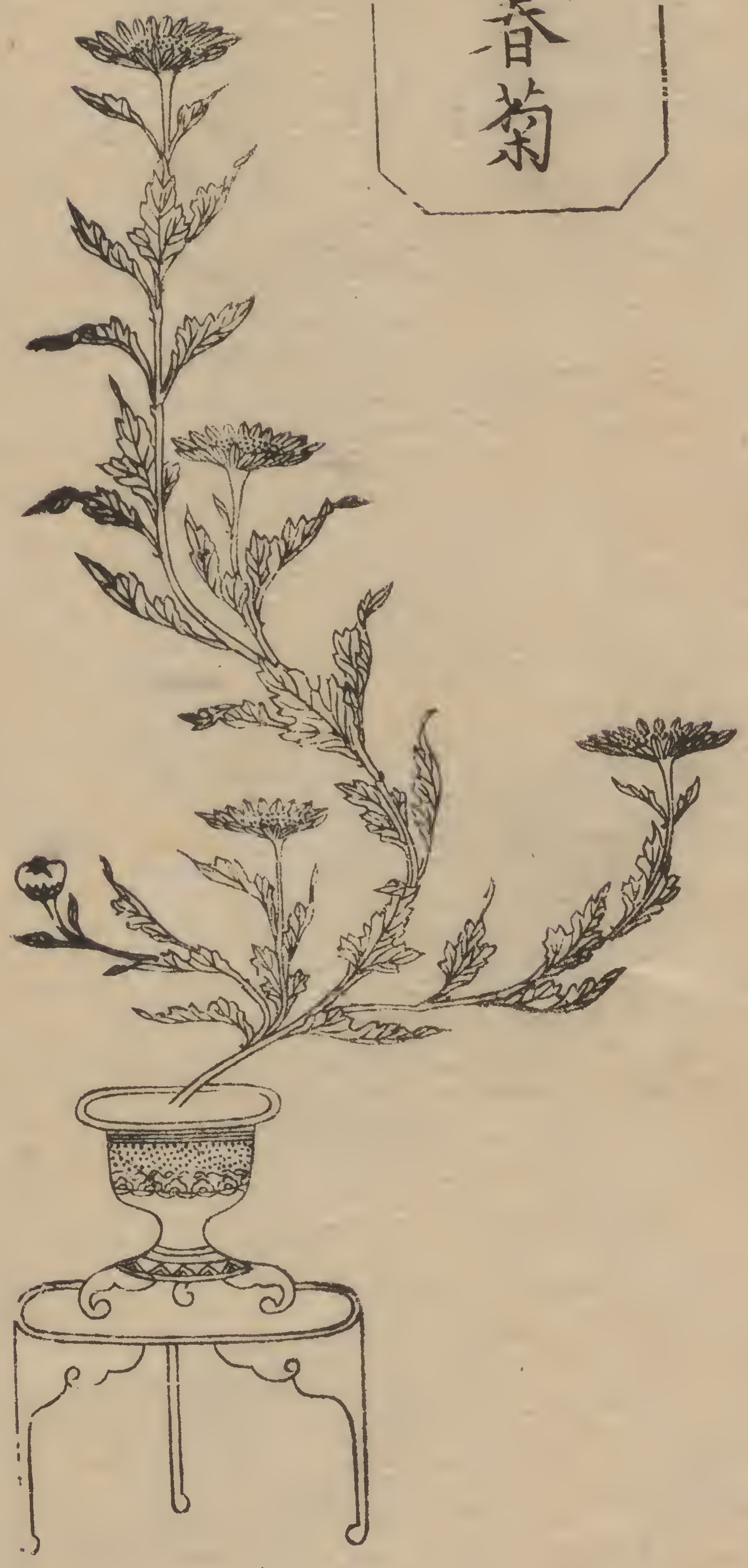
葉白桃

交松庵門人　伊藤氏
全交庵一曲

タマノト菊

伊紺氏
竹交庵一虎

香菊



交松庵門人 渡邊氏
一雍

玉の登菊

春松庵門人内藤氏
春藻庵一甲

残雪
桃

春松庵門人
藤[illegible]氏一[illegible]

イノコ柳
寒菊

春松庵門人
下總府馬
鈴木氏　一敬

蕪蔔

景松庵一泉

燕子花 四本 口傳

景松庵門人
樋口氏 一犀

白梅

景松庵門人 僧
播龍庵 一薫

葉蘭
拾壹枚

景松庵門人
櫻井氏 一重

ヱ三齒朶
長春

景松庵門人
安藤氏一藤

秋海棠

景松庵門人
川﨑氏一備

具在肯

ヤウキヒ
海棠

交松庵門人　砂永氏
旭交庵一昇

燕子花

里松庵悴
鶴松庵一岡

栴檀の二葉ハ頃を経て大木となり松枝の
鶴の子をはや鳥の丹情とうけて巣を
飛ぶるもの也

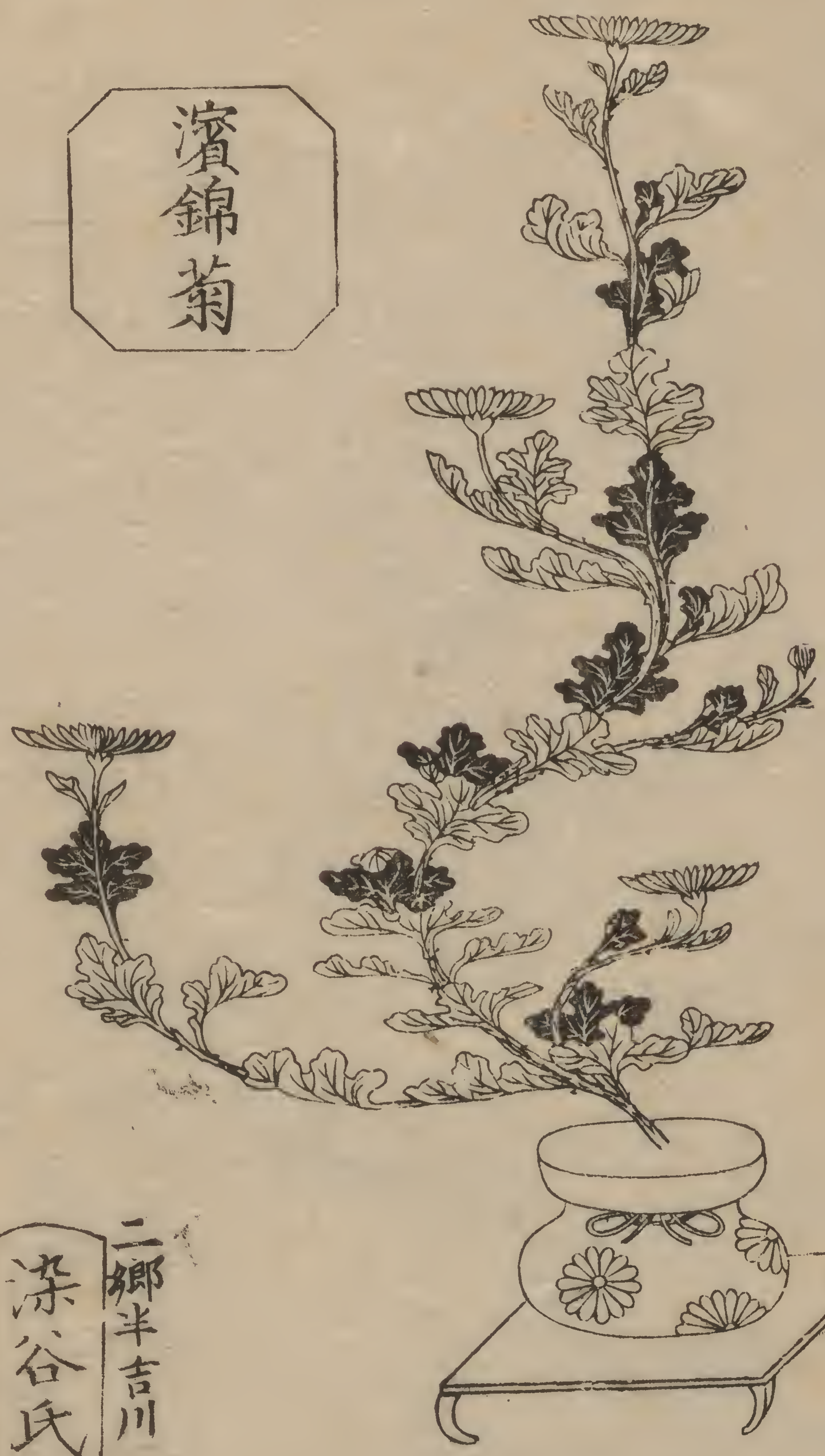
唐崎の松の最中や
和かみとり

鶴松庵一岡

水仙
五拾本

里松庵悴
鶴松庵一岡

濱錦菊



二郷半吉川
滌谷氏一松

鬼蓮
真薦

下総野田
大塚氏一美

烏瓜
寒竹
野菊

下総木野崎僧
貞松庵一照

三ツ拍草

能勢氏一勢

葉柳
白玉椿
覇王樹

二郷半吉川
高鹿氏一僊

水仙
蛇目菊

聴松庵一美

射干

下総野田
杉崎氏一廣

大川に浅瀬もあれハ小池に深きもあれハ
其庭を捨て見れハ深浅を知るへきなり
入らんとやせん鴨のたつ川をせきて鳥れハ水浅
汲ふるき庭の傍ゐる鴉有りて諸(?)
花のふり袖の梅にこぼるる所をはれ

学ふ事的のなき弓弦射るにひとし
其ゆく義理定めすましにして居ては遥ふ
とをし 隠遊藝たり如何極
ここに至ても聖賢の居ますも入るへし
更に里松尾の主中興挿花の道を
開き宗祖に真甚をも極めて前源をも
極めて枝葉の達し 安き弐工風
あれしも深く世上に書しも弐
生ふれし挿花志を用しきてれ生
義ふりへ其實をも探りても早く

此葉は的り　菊保さる字し亭
多年書に招きて實をも探ると之
此ゝ毎来ゝ其庭の游りし無きを感まゝ保
餘りに葉拭せる
能静民主
花名　澹松庵一通
天保庚子秋書

津逮堂藏版
京都市三條通御幸町角
吉野屋　大谷仁兵衛

日本京都
喜多虎之助

From T. Kita
Kioto
Japan

進上
遠州流生花之圖本
四冊持

Enshiuriyu Ikebana
drawing book

米國
フリヤ様